



寒川神社
祈年祭

田打舞神事



Handwritten signature or mark at the bottom right corner.

祈年祭

きねんさい

毎年2月17日に斎行されています。祈年祭は、春の耕作開始にあたり1年間の五穀豊穡と産業の発展を祈る祭典であり、伊勢の神宮をはじめ全国の神社で大祭として執り行われています。明治の改暦前には旧暦2月4日に行われていましたが、改暦に伴い現在の2月17日に斎行となりました。斎行日に関しては全国で統一されておらず、寒冷地では3月以降に斎行されている神社もあります。また宮中の賢所においても祭典が行われ、天皇陛下が御親拝（天皇陛下が御自ら拝礼されること）にいられます。

※祈年祭：「としごいのまつり」とも呼ばれ、「とし＝稲の美称」、「こい＝祈り」を指すとされ、米をはじめとする五穀の豊かな稔りを祈ることを意味しています。



御神前において田打舞神事を奉納する黒尉(右)と白尉(左)



田打舞

たうちまい

当神社の田打舞神事は、別名「福種蒔ふくたねまき」とも称され、奉仕者は、古来より田端村たばたむらの旧社人である齋藤土佐氏さいとうとさにより「太夫面たゆうめん」とも称して行われてきましたが、明治維新後に後裔がなくなり一旦途絶え、明治21年2月1日に再興されましたが、同27年に再び中絶しました。その後、大正12年に再興され、改作の折から村持神主の小菅家に黒尉くろじょうを務めていただき、現在は小菅隆志氏（当神社の神事奉仕者）がご奉仕をされております。

大正時代以降、田打舞神事の形態は明治初期の神祇制度の改革により旧来のものは変化したものとして伝承されてきました。明治44年に刊行された「寒川神社誌」の寒川古式祭祀においても神楽歌等が記載されているにすぎず、これを憂慮し古くより続く伝統神事の復興を願い、国立文化財団研究所のご指導により、平成3年には旧態の田打舞神事の再興が行われ、現在へと継承されています。

復興された現在の田打舞は、時代を越えて受け継がれてきた黒尉くろじょうと白尉はくじょうの翁面をつけた社人と神職の2名の舞人により、寒川大明神の御神前において奉納されています。

田打 たうち

〈春の初めに田をおこし、水を引き入れる様子〉

めでたしや、めでたしや。参りたるついでに、国々のみそかち。

かづいてらしとことこ、かこすきの出雲の国、かこすきの出雲の

あらくわを、千具万具、ちよふして春の日のながき、鍬がらさい

てをめさるる。めなが口の鍬をば、をさきさげてきつげ、をさき

ながの鍬をば、めさきさげてきつげ、きつげ比べて、調子やハッパ、

ハッパハッパ合せて、千人のお百姓、万人のけんぞくに、二勺つづ

たまわる。桜田さくらたをのぼりに、柳町やなぎまちをくだりに、難波なればの小池の水を

引き、鍬入りの田もみんなめでたく候を、明あきのかたへさしむき、一

鍬チヨウと打って、さんぶとおこいて、鼻にキットおしあて、かこん

でみたれば、いつもたいせつの銭がみの香りと、金がみの香りがハッ

パほんかり、ハッパとめ

でたし。三鍬・四鍬う

なへば、たいと宝とび

しゃもんこぶくが、た

だこの身内へ、つとよつ

とよと、つとらつとら

と打つたり、重ね鍬と

打つたり。



草敷・代ならし くさじき・しろならし

〈田の草を取り畦をつくり、代掻きをする様子〉

春の鍬そいが、打つからものよし、打つたる田はくれくれ、

掻いたる田はみちみち、みちみちが上には、なに草なし。

あの山に候を、この山に候を、しろがねでうらにはとこ、こ

がね草が菜の花、いつさい草よし草、あしゆらなるらと、苗

代の四つのすみに、たかだかと下ろいて、下ろし置いた所

へ草敷きの上手が、あれやほにこれやほ、きぶちにきとろ

く、むなご太郎めが、一のせんに参りて、こむらごのたすき

を、かいから括つてうん出し、かい結んでうんだし、だいだ

いとうんだいた。朝日あさひの方へさし向き、めんどり羽もしつ

とり、おんどり羽

もしつとり、しつと

りしつとりと、しい

て取る所を、一丈や

五尺の、ならしの

竿をつとり、所ま

てうに、世の中を

平らに、まっ平らに

直して。



◆金字…翁謡

◆黒字…地謡

◆青字…翁謡・地謡

種蒔 たねまき

〔苗代に初種を蒔き、鳥を追ひ払う様子〕

しよくやま
食山のこしよりも、福の水サツとかけ、ユラリサクリと福種蒔くな。

まいてやその後、おん内へ参りて、蒔くべき種あり、をいでの宝に、弓持ち槍持ち兜持ち、まこうな。納戸へ参りて、蒔くべき種あり、十二のそでぎぬ、重ねぎぬ、まこうな。お庭へ参りて、蒔くべき種あり、めかまとをかまへ、さんぜんめりたて、こぶたもち、まこうな。みやまへ参りて、蒔くべき種あり。千びき万びき、かいたてならべたる、こまのものはやわぎに、早々とまこうな。女と申すは、正月が参れば、殿ごに甘えて、銭をも乞い取り、金をも乞い取り、数えたつてみたれば、五鍬がかを油、三鍬が白もの、おん揉み合わせて、トロリ解け合およ、



けはひしてその後、寄り合い友達、ころうをつ

こうよ、よくすめころうよ、鷹狩りするとも、

尻ばしふりなよ、ひとの夫とるなよ。蒔いてや

その後、みの口米をば、何石搗ういたよ。千石搗

いたよ、こがねのいかけへ、ザラザラ移して。

一番に田の神に、二番しんろのみに所神へ供する、三番

に寒川大明神へ供する。

くうしやおさめて、明あきのかたから、まこうな。

子供等米かめ・かめ・かめ米をもかむべし、鳥

をも追うべし。

祝詞 のつと

〔寒川大明神に豊作を祈願する様子〕

クラクツと蒔いたる種なれば、

アザアザあざみの如し、

ホキホキ箒の如し、

ククウクツと、掃いて候。

さて、そのうち、背いの高いが金持ち、

背いの低いが銭持ち。二分が八勺、大分

が八勺、はつくの数が、八十人、あいて

うたい、ぴたりとなり、あきないとつた

めでたさ。



☉ 苗ほめ なえほめ

〈苗代より、良く伸びた早苗を取り束ねていく様子〉

やあらやあら今日かい、

よう今日かいな。

今朝の苗の取りよさ、今朝の苗を取りあげて、なきのはにやとすへ、ひるすすきよしのはに、ちようどやどりきたりな。

チヨチヨラ、チヨと、参つて。



一万五千ちようの苗を、たった二時に取り上げ、後ろキツと見てあれば、ひるまのおおみずや、うるちひろめて十萬石、粟ふえるといって三萬石、こなたのごふだいじんのうち。

☉ 昼飯 ひるめ

〈ひと段落して昼食をとる様子〉

おめしの上手は、ござらめかあしからざくし、ゆらりとかつぎ、めがまをかまへ、つつ立ち上がり、エイヤ、エイヤと割つたるは、これ今日の米割りのところなり、さて菜汁なじるにとりては、後ろの山の筍たけのこ、前山の蕨わらびは、さて又なますにとりては、大果報だいかけほうのあんじよう、おうわらさないし、はらぶもあう圓増えんぞのうむ、松のまな板三十三枚、パリりと敷き、祝いの包丁皆で撫で、スイスワリ、スイスワリと、おろしされてござ



る。さて、その中に、さるお早乙女ななみきはなのおしやることには、身は七月半ななつきはんにおなりなさる。葱なます食いたいとおしゃる。作りしんせてござれば、更に八十サラ・サラサラと蒔いてござる。日に夕酒朝酒三十杯参るなり、我腹をば、穀作りのかめと思し召せ。タウリと打ち上げ、中のまちを、トウドリ、こてらんの、めでたさ。

田植 たうえ

〔腰をかがめ、苗を手植えていく様子〕
相模なる、寒川大明神の御前の姫小松。

松もひりやうめく、殿もひりやうめくと、三度ちばうち、歌って田をば、ソンプリヒルりと、植え申したりな。

相模なる、相模早乙女が。

これ、さつとまいりて、歌おろいた、次第は、面白くもおんろいた、ととなかくな、おれかちちか、チョンボタなんぼばかり、チョンボッタ、だんごなかう、チョンボッタ、よ吉よ吉、だ



いじもない、孫をもうけて抱こうな、ひこもうけて、抱こうなど、歌をばうちうたつて、田をばソンプリ、ユルりと、植え申したりな。

稲刈 いねかり

〔束一束稲を刈り、神々にお供えする様子〕

相模なる、相模一の宮の、ふもとなる産子は。

綾の錦なる、手こそしないたり、おやれおふ手は、しないたりな、いつもより、今年は、福太郎がでてこそ嬉げんなる、ふせいして、天竺を照らしたもう、腰のほどにしわ寄せて、せじやうの、中のまろかつては、所神々にまいらする、二鎌刈つては、田の神にまいらする、三鎌四鎌刈つたれば、二百三百はとつたの。



稲叢 いなむら

〔豊年を喜び、歌舞の宴を催し感謝する様子〕

二百三百はの、

稲をもつて、試し取りにしたれば、千石ばかりとつたの、万石ばかりとつたの、いふにひけば、

食の山。

酒に造れば、

泉となる

汲めども汲めども

尽きもせず。

万歳楽や万歳楽や。





相模國
一之宮

寒川神社

〒253-0195 神奈川県高座郡寒川町宮山3916

TEL:0467-75-0004(代表)

<http://www.samukawajinja.jp>